

待降節第四主日

2019.12.22

マタイ 1・18-24

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

待降節も第四主日を迎え、クリスマスも間近に迫ってきました。今日のミサでわたしたちが祈り求めたいことは唯一つ、今年もこうして迎えるクリスマスがわたしたちの心に喜びをもたらすものとなりますようにということです。クリスマスを喜びのうちに迎えるために最も必要なことは、どんなにわずかでもいいから、わたしたちの心のうちにゆとりを持つということです。クリスマスはわたしたちをおとぎ話やメルヘンの世界に誘う魅力を持っています。クリスマスを喜びのうちに迎えるためには、クリスマスの持つそのような魅力に身も心も委ねるためのゆとりが必要なのです。日々の生活の重荷に押しつぶされ、身も心も疲れ果て、将来への不安に心ふさがれたままでは、周囲のクリスマスの雰囲気も、虚ろで、騒々しいものにしか感じられないことでしょう。現実の生活の厳しさに引きずられるままの、心の中に苦々しい思いを静め、クリスマスが祝うことに心向けることが出来たなら、それだけで、わたしたちはわたしたちの心が一番必要としているぬくもりと、しなやかさを取り戻すことが出来ることでしょう。クリスマスにはそのような不思議な魅力があります。

クリスマスを中心としたこの季節のミサで、わたしたちは、マタイ福音書とルカ福音書の初めに語られている、イエス・キリストの誕生前後の物語と、ヨハネ福音書の初めの、みことばの受肉の神秘を歌う賛歌に耳を傾けます。イエス・キリストのご生涯の初めを語るこれらの福音は、イエス・キリストへの信仰を生き、その信仰を後世に伝えた最初の教会の中で、次第に明らかになって行ったイエス・キリストの神秘にわたしたちを招き入れます。イエス・キリストのご生涯の初めを語るクリスマスの物語は、二千年の歴史を超えて今のわたしたちの教会に受け継がれてきた、イエスの弟子たちを中心とする最初の教会のイエス・キリストへの信仰を表明しています。これらの物語において、その中心に表明されているイエス・キリストへの信仰は、今日の福音で見れば、イエス・キリストは旧約聖書の預言者が告げているインマヌエルとしてわたしたちのこの世界に来られたお方であるということです。インマヌエルとは「神はわれわれと共におられる」という意味であると説明されています。

弟子たちはどのようにして、このような信仰に導かれて行ったのでしょうか。弟子たちはイエスとの最初の出会いから、イエスの十字架の死に至るまで、お側近くにあつて見聞きしたことを通して、さらには、弟子たちだけが体験し、その証人となることに彼らのいのちまでもかけることができたイエスの復活という出来事を通して、自分たちが弟子として付き従ったナザレのイエスのうちに「神が共にいてくださる」ことを、イエスこそが預言者が告げていたインマヌエルであることを知ることが出来たのです。

預言者の告げたインマヌエルの預言は、旧約のダビデ王と深く結ばれています。「ダビデの家よ、聞け。あなたたちは人間にもどかしい思いをさせるだけでは足りず、わたしの神にももどかしい思いをさせるのか。それゆえ、主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」今日の第一朗読で聞いた預言者のことばです。おとめから生まれる男の子はインマヌエルと呼ばれ、それが主御自らダビデの家に与えられるしるしであると、預言者は告げています。何のしるしかといえ、主なる神がダビデ王に与えられた約束は忘れられてはいないということのしるしです。その約束とは、サムエル記下 7 章 16 節に記されている、預言者ナタンを通してダビデ王に与えられた主なる神の約束です。「あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこしえに堅く据えられる。」ダビデの時代からイエスの時代までおよそ千年、預言者イザヤが活躍した時からでもおよそ七百年の歴史を超えて、旧約のイスラエルの人々の心に、事あるごとに去来し、将来への期待を育んだ、メシア待望のもととなっている、主なる神の約束のことばです。

イエスの誕生を語る福音書の物語は、イエスこそがインマヌエルとして、旧約聖書に記されているこのような主なる神の約束を実現したお方であるとの信仰を表明しているのです。なんと、夢のような話ではないでしょうか。イエスの時代には、ダビデ王家そのものは、はるか昔に消滅していました。それにもかかわらず、イエスの誕生を語る福音書の物語は、ガリラヤのナザレの大工ヨセフの息子として育てられたイエスが、預言者が告げているインマヌエルその人だと言っているのです。ナザレの大工であったヨセフはダビデの子孫の一人だと言っているのです。イエス・キリストに対する、このような信仰表明は、現代人であるわたしたちにとってだけではなく、イエスの同時代の多くの人々にとっても、夢物語のように思われたにちがいありません。

わたしたちが信じるイエス・キリストは、夢のような神のみわざをわたした

ちの現実の中にもたらしにくださったお方です。現実の社会の中であって、現実の生活を生きるわたしたちは、現実を引きずられたままでは人間として生きてゆくことは出来ません。現実を受け入れて生きてゆくためにも、わたしたちは現実の意味を与える夢を必要としているのです。夢があつてこそ、現実に打ちめされることなく、厳しい現実を生きてゆく力を見出すことが出来るのです。聖書が語るイエスの誕生物語は、現実を生きるわたしたちには夢物語のようにしか思えないかもしれません。けれども、そのようなわたしたちは、それを必要としているのです。現実を生きるわたしたちの心が開かれ、イエスの誕生を語る福音を受け入れることが出来る時、わたしたちは、インマヌエルとしてわたしたちの現実を共に生き、導いてくださるイエスをわたしたちの心に向かえることが出来るのです。

今日の福音の主演であるヨセフは、夢の中で聞いた天使のことばを信じ、夢にしか過ぎないと思われる神の指示に基づいて、マリアを受け入れ、生まれてくるインマヌエル、イエスの父となったのです。聖書にわずかにしか記されていないヨセフが生きたヨセフの現実の人生は、ヨセフがイエスの誕生に先立って見た夢を受け入れたことに掛かっていたのです。

最初にも述べたように、クリスマスはわたしたちを夢の世界に誘うような魅力に満ちています。それは厳しいわたしたちの現実の中にわたしたちの手によって人工的に持ち込まれる夢の世界なのでありません。それは、神の目に映っているわたしたちの現実の世界です。神がその御子を遣わして抱きとめておられるわたしたちの現実を世界です。わたしたちは、わたしたちの信仰に基づく、このようなわたしたちの現実を抱き取る夢を必要としているのです。そのためにも、迎えるクリスマス、現実疲れきっているわたしたちの心が開かれ、ヨセフが見た、神からの夢の世界を味わう恵みを願いたいと思います。